

先月のことになるが、数名の生徒を前にして、久しぶりに国語の授業を行った。中学校の教頭時代には、技術と家庭の授業を担当していた。小学校の校長時代には、道徳や国語などの授業を行ったことがある。指導主事時代には、先生方を前にして、国語の模擬授業を行った。

中学生を前にしての国語の授業となると、実に14年ぶりとなる。生徒のこともよくわからず、いきなり授業をやるわけだから、飛び込み授業のようなものである。学年は中学3年生だった。国語の教科書を見ると、そこには「論語」があった。テスト範囲にも入っていた。

早速、「論語」を知っているか、聞いてみたところ、知らないという。そうであろう。古典には古文と漢文があり、日本のものは古文、中国のものは漢文、「論語」は中国だから漢文と、簡単に確認した。中国、中国とは言いが、本当は何というか聞いてみたところ、正しく言える生徒がいた。意外と言えないものである。

まず、教科書にある「書き下し文」を私が読んだ。次に、私に続くように生徒に読ませた。古典に限らず声に出して読むことは大切である。何度か読んでみると、上から下へと読んでいくのではなく、下から上に戻るように読む箇所があることに気がつく。そして、文の左側に何やら記号らしきものがあることに目が行く。

ここまでは、生徒に気づかせるが、この先は教える部分である。その記号らしきものの名前と役割を説明する。理解できたかどうかを確かめるために、理解したことが定着するように、練習問題に取り組みさせる。国語でも練習問題はあるのである。

漢文は、もともと漢字だけの文である「白文」の状態で日本に入ってきた。日本人は、そこから自分たちが読めるようにと、フリガナや返り点などの記号を考え出した。ついでに、漢字からひらがなやカタカナもつくり出したことも説明した。その際に、「安」からできたひらがなを問題として出した。正解できた生徒がいた。

次は、「訓読文」である。「書き下し文」よりも読むのは難しくなる。右側のフリガナがなくなるからである。だが、生徒は、意外と読めるのである。なぜなら、書き下し文を繰り返し読み、読む順番を表す記号の意味も理解したからである。

そして、教科書にある書き下し文と訓読文をノートに書かせる。見ながら、そのまま写す視写という作業である。これも音読と並んで大事な学習活動である。生徒は、意外と正しく写せないものである。

教科書には、「温故知新」が載っていた。この言葉を知っている生徒もいた。ついでに、四字熟語をいくつか問題として出し、これらはすべて中国のお話からできた言葉であることを話した。「論語」は、2000年以上も前のものである。もう少し、時間があればやりたかったことがある。なぜ、私たちは、そんなに古いものを学習するのか。このことについて、じっくり考え、生徒の考えを出し合い、意見交換をすることである。

授業をしてみて、自然と、説明は簡潔にし、適宜、問題を出すことで考えさせながら、テンポよく進めていたことに気がついた。これならば、まだまだやれそうである。そんな感触をもつことができた。改めて、知的におもしろい授業がしたい、という思いをもつことができた。